

「来たるべき領土、来たるべき民衆——観念的世界革命論を越えて」

※すでに井上達夫「世界正義論」がトマス・ボッケを「学的」に批判している。それも有り、本稿ではボッケ批判は簡単な方式をとった。(二〇一六年五月二五日記)

### 若者たちの意志

遠くの国から中東の国に到り、そこから徒歩で国境を越え、イスラーム国へと向かう若者たちに私は打たれる。その真似をできないことはわかっているが、私は揺さぶられる。その歩みに付き随いはしないが、若者たちのことを私の力の及ぶ限り想像してみる(一)。

十代の頃、私は、解放戦線に助力するために南ベトナムへと向かうべきではないのか、少なくとも、その意志のある若者を義勇兵や後方支援者として送るか否かを真剣に検討すべきではないかと考えていた。然るべき機関決定が届けられたなら、私は海を越えてベトナムへ向かったと思う。そして、これまで生き延びることもなかったはずである。

いまは、時代の違い、綱領の違い、戦略の違い、思想の違いは問題にしない。いまは、何らかの理念・理想・大義と若者たちの意志との関係だけを問題にしている。理性には決して回収されることのない意志の力、理性の欺瞞や腐敗を告発し超越する意志の力を擁護しようとしているのだ(二)。

こう指摘しておきたい。大多数の人は、一九七〇年代の日本国では一定の改革が進められたと言ってきたはずだ。では、問い返したいが、あの程度の改革でさえ、ベトナム人民の闘争と犠牲を抜きにして達成できたであろうか。国内の反戦運動にしても、その事後的な効果としての国内的变化にしても、ベトナム人民のおかげで起こったことであると言うべきではないのか。一九七〇年代の米国についても同じである。大多数の人は、当時の改革が公民権運動の成果であると言ってきたが、公民権運動が力を持ったのはブラック・ムスリムをはじめとする命がけの闘いがあつたからではないのか。非暴力運動がその効果を発揮できたのは、米国の内外で命がけで闘った民衆がいたからではない

のか。

いちいち事例はあげないが、同じことは、歴史のあらゆる局面について言うことができる。いかに非理性的・反知性的に見える闘争であれ、そこに賭けている民衆、そこに賭けざるをえない民衆が存在するのであり、その賢くもあまり愚かでもある民衆の力によるのでなければ、歴史が動くことなどないのだ。

### グローバル・エシックス、あるいは、富者の欺瞞

先進諸国のグローバルな政治家・官僚・知識人(以下、ネグリにならって「帝国貴族」と呼称する)は、この間、何を為してきたか。冷戦体制の終焉後、リベラル・デモクラシーが世界標準となつたが、政治的にも経済的にも依然として解決すべき問題が残っていると指摘してきた。それはその通りだ。では、帝国貴族は、いかなる問題を取り上げ、いかなる課題を立ててきたか。政治的には、第一に、世界の大多数の国で民主制が布かれていないこと、形式的に布かれていても機能していないこと、場合によっては、議会政党制民主主義そのものが内戦状態を惹き起こすこと、したがって、第二に、ある場合には民主化革命を輸出してやること、別の場合には下からの民主化運動を支援するために介入を強めること、内戦状態に陥れて先進諸国の意に従う側に武器援助を行うこと、必要なら武力介入を行うこと、そして、第三に、破綻国家や失敗国家については、そこに統治を確立させるために、人道支援を含むあらゆる介入を進めることである。

他方で、帝国貴族は、経済的には、世界の貧困が問題であるとしてきた。曰く、ある国や地域には、安全な水がない、

基本的な衛生が保たれていない、必須の薬物が無い、内戦や災害から避難できるシェルターがない、電気のインフラがない、舗装道路がない、公共部門以外では賃金労働の機会がない、文明的で文化的な教育を受ける機会がない。そのような国家状態で生き延びている人間は、貧しいだけではなく惨めである。他所からの人道支援を俟つほどに、無力である。だから、先進諸国がグローバルな責任を果たすのでなければ、世界の貧困を解決することはできない。このように帝国貴族は語ってきた。何度となく語ってきた。いつからだろうか、ずっと昔から繰り返して語ってきた。

グローバル・エシックスの代表的な論者であるトマス・ポツゲも、同じ台詞を飽きもせず繰り返している(3)。「人間の貧困という甚大なカタストロフィーが継続している。貧困に関連する死亡原因による年間死亡者数は一八〇〇万人であり、世界の年間死亡者数のおよそ三分の一に達している」とである。ポツゲのような帝国貴族は、貧困が「殺害」する人間の数を、戦争や内戦が殺害する人間の数を遥かに凌駕する一八〇〇万人と計上して怪しむことがない。これは、何ごとなのか。ところで、ポツゲによるなら、この事態が先進諸国市民にとっての倫理的・道徳的な問題になるのは、二つの事情が存在するからである。第一に、この貧困は、世界経済の未曾有の繁栄のただなかで起こっており、その繁栄をもってするなら、生命と生存を脅かす貧困を無くすことは「容易」である。経済的な不平等を解消するためにはグローバルな所得分配を変更するだけで足りるのであるから、それは「容易」である。富者の所得と資産の「小さな」部分を、第二次世界大戦での連合諸国の「血の犠牲」より「遥かに小さな」コストを費やすだけで今日の厳しい貧困を回避させることができるのであるから、それは「容易」である。これほどまでに「容易」であるのに、それを果たしていない先進諸国市民の責任は弁明しようがないというわけである。第二に、ポツゲによるなら、グローバルな不平等と格差は、縮小するどころか、ますます「拡大」している。だから、先進諸国が「容易」な解決策を実行

しない不作為の責任はいや増しに増しており、各種のグローバルな経路を介して分配的正義に適う移転を早々に実現しなければならぬ。このように帝国貴族は繰り返し主張してきた。

問い返さずにはおられない。「容易」であるはずなのに、どうして実現されてこなかったのか、と。第二次世界大戦後に限っても、グローバルな分配的正義の方策は何度となく、手を替え品を替え提案され実行されてきたのに、どうしてますます不平等は「拡大」してきたのか。本当に、それは「容易」なことなのか。「容易」であるのに実現しないとするならそれを阻害する勢力や体制を何と心得ているのか。そちらこそを改革するべきではないのか。そこについては口を噤んでいるのはどうしたことか。あるいは、先進諸国の側からすると「容易」なのだが、非民主国家や破綻国家がその実現を阻害しているとは見なしているのか。それにしても、それら国家の改革策をわれわれは何度となく聞かされてきたが、成功した例があったか。にもかかわらず、そこについても口を噤んで、解決は「容易」であるとは何ごとなのか。要するに、本当に驚くべきことだが、帝国貴族には、いささかの自己反省も自己批判もないのである(4)。

#### 世界正義論、あるいは、富者の微睡み

このような歴史の繰り返しに対して、貧困者が、あるいは、貧困者を代理する者が、怒りを抱くのは当然のことである。その事情を諒解している者は、帝国貴族のなかにも存在する。例えば、現在の有志連合を正当化する議論を提示していたジョン・ロールズを批判する文脈において、井上達夫はこう書いている。



節度ある階層社会における宗教的差別や市民的政治的人権侵害にリベラルな先進社会が目をつぶる代わりに、後者の世界分配正義侵犯に対する追及を棚上げにするという取引は、階層社会にとっても、リベラルな社会にとっても、「おいしい取引」であろう。「……」節度ある階層社会の柔和な外観をもった差別や政治的抑圧に晒される人々や、豊かな先進諸国の冷酷な無視により、基本的必要充足を阻まれたまま放置される人々など、この政治的取引によって黙殺され不可視化される人々が、忍従を拒否し、怒りをテロその他の形で暴力的に爆発させる可能性は常に伏在しており、かかる「倫理的時限爆弾」を抱えた政治的妥協は、長期的視点から見れば、安定性を達成することもできないだろう(5)。

では、その「おいしい取引」を政治的に変革する道は、忍従の拒否と暴力的な爆発以外にあるのだろうか。「長期的」に「安定性」を目指すとしても、そこに到る道は、「倫理的時限爆弾」を実際に爆発させること以外にあるのだろうか。そんな問いを真剣に立てることのないまま、井上達夫はポツゲ的な「容易」な道を高唱していく。

分配的正義は人々の間での本来あるべき正当な権利や利益の分配の在り方、すなわち第一次的に表現されるべき理想状態を規定する原理であり、正義論においては「理想理論 (ideal theory)」の課題である。これに対し、匡正的正義は、本来あるべき正当な権利・利益の分配状態が侵害された場合に、それを是正して失われた道徳的理想状態(……)を回復する方法を規定する原理、すなわち「第一次になされるべきことがなされなかったときに、

第二次的に何がなされるべきか」を規定する原理であり、正義論においては「非理想理論 (non-ideal theory)」である。したがって、匡正的正義の観念は分配的正義の観念を前提としており、分配的正義論なき匡正的正義論はありえない(6)。

「本来」「元来」「旧来」の区分を無視しているにしても、議論の運びは正当である。非理想理論、言いかえるなら、現実的と称する理論もまた、理想理論を前提とするのであるから、現実的に「おいしい」解決を考慮するにしても理想理論の実現も同時に考慮せざるをえないし考慮するべきであるというのだから。では、再び問うが、世界大の分配的正義の実現、本来あるべき第一次的な分配状態の実現、それを達成する道は、「倫理的時限爆弾」を実際に爆発させること以外にあるのだろうか。

ここに到って、いまの私は、むしろこう主張しておきたい。そもそも、グローバルな倫理、世界大の正義にとって主要な問題を、経済的不平等の是正に置くことが間違えている(7)。言いかえるなら、政治的・経済的な主要矛盾を、貧富の差に置くことが間違えている。そうしている限り、「おいしい取引」以上のものになることはない。主要な変革の課題は、悲惨からの解放ではあっても、決して貧困からの解放ではない。忍従からの解放ではあっても、決して所得格差の是正ではない。富者の資産を奪取することではあっても、決して富者の資産を移転することではない。端的に言うなら、先進諸国の優位の打破ではあっても、決して先進諸国が死がうプログラムの受忍ではないのだ。そもそも、先進諸国に対する信頼など、とうの昔に失われているのであって、われわれはそのことをめぐる自己反省や自己批判抜きには何も語れないはずではなかったのか(8)。

## 超越的な普遍主義、あるいは、領土と人民なき脱領土化

われわれは、政治的にも経済的にも出口が見えていない状態にある。率直に認めるべきだが、われわれは、先進諸国の内部と外部における「倫理的時限爆弾」の爆発に対し、その代替となる道を確信をもって指し示すことができない。そのようなときには、様々な形で爆発する者が大義とするところに学ぶところから始めなければならない。現在、その大義は「カリフ制」と呼ばれている。中田考は、それを理想理論として提示して、次のように書いている。

カリフ制とは、イスラーム法学の用語であり、イスラーム法は属人法である。イスラーム法は、ムスリムだけに適用され、どこに住むかに関わりがなく、全てのムスリムに適用される。それゆえ、イスラーム法に照らすなら、カリフ制の成立は、一定の領域を指して「ここに成立した」と言えるようなものではないのである。カリフ制は、領域に成立するものではない。言うなればカリフ制は、ムスリムの心の中に再興されたのである。／イスラーム国の樹立の真の意義は、サイクス・ピコ協定体制を否定しイラクとシリアの国境を越えて実効支配を確立したことでなく、世界のムスリムたちにカリフの名を思い出させたことにある(9)。

ここで「カリフ制」「イスラーム法」を「世界正義」「グローバル倫理」に置き換えるとすぐに気づくが、その議論の運びは帝国貴族のそれと相同である。普遍主義的な理想理論を高唱する点で両者は等価である(10)。そして、中田考は、カリフ制が普遍主義的な理念としては、ドゥルーズ／ガタリがいうところの脱領土化の運動に相当すると、詳しく言いかえるなら、国家の領土化やコード化を越え、必ずや国家をその実現モデルとする資本主義の脱コード化や公理系をも越えて絶対的に脱領土化する運動に相当すると主張しているのである。中田考が、「イスラームの家」を、ドゥルーズ／ガタリがいうところのノマド的平滑空間、脱領土化の運動が生起するところの内在平面として押し出す箇所も見えておこう。世界的な分配的正義論も語られていることに留意されたい。

この大地はアッラー以外の誰のものでもなく、それ故、この大地をバラバラに切り刻み、その間の移動を制限することは何人にも許されない。西洋の領域国民国家のイデオロギーとは対照的に、イスラームではムスリムが別々の国家に属することを禁じている。「……」国境の廃止とイスラーム秩序の統合による大地の解放はイスラームの使命にとって必要不可欠な本質なのである。大地は地域によって気候が異なり、地下資源にも差異がある。加えて特定の地域が一次的に自然災害や人災などで生活が困難になることもある。よって、大地における移住の自由の実現は人類の生に公正と平等をもたらすための第一歩であり、唯一人のカリフの存在は、人類の平等を否定する支配者たちが各々の権益を守るための世界分断の共謀のカルテル「領域国民国家」システムの出現を防ぐために必要なのである(11)。

では、この理想理論を実現する道はどこに探られるべきなのか。「容易」であるはずの資産や資本の移転によるのではなく、これも「容易」であるはずの人間の移住によるとされる公正と平等の理想は、どのようにしてこの大地の上で実現されるのか。領域国民国家も国家連合も有志連合も大地のノモスに反しているのは明らかであるとして、そ



のノモスを、「ムスリムの心」に刻むだけでなく、この大地に刻むにはどうすればよいのか。ドゥルーズ／ガタリの筆法をもってするなら、脱領土化の運動は再領土化する。必ず再領土化するし、再領土化しなければならぬ。そうしなければ自滅するといった消極的な理由によるのではなく、そうしなければ勝利できないからである。旧体制の弔鐘を鳴らすためには、弔鐘を据える領土と弔鐘を鳴らす人民が不可欠なのだ。ところが、中田考ですら、その再領土化の試みを切つて捨てるのである。

イスラーム法の限界の範囲内にあるとはいえ、「他者」に対して極めて「非寛容」で酷薄な解釈を取るイスラーム国がカリフ制再興の衣裳を纏つてシリア・イラクの地に出現したのは、権力者とその取り巻きの御用学者たちとの戦いが物理的な殲滅戦の形態を取るしかないことが否応なく明らかになったシリア・イラクの状況に起因するのである。／イスラーム国はシリア・イラクの政府および反イスラーム民兵集団との戦闘を継続しながら、住民に最低限の行政サービスを提供し、国家の体裁を整えるために、シリアにおいてのみならずイラクにおいても旧フサイン政権を担ったバース党に人的資源を求めざるをえなくなったが〔……〕そのため、戦時体制、治安維持のためとの口実で、イスラーム国の行政に、イスラームとは真逆の全体主義警察国家の手法が、知らず知らずのうちに持ち込まれることになってしまった。／そのようなシリア、イラクでイスラーム国としてカリフ制が発現するに至つたのは、ウンマ（ムスリム共同体）全体の責任である〔12〕。

この状況分析は正しいだろう。戦争状態においてはどこでも起こりうる事態であり、戦争状態に入ってしまったからには認めざるをえない事態である〔13〕。そして、中田考が、この事態に対して「ムスリム諸国に住むムスリム」にも「非ムスリム諸国に住むムスリム」にもその「責任」があるとし、全ムスリムに「厳しい試練を突きつけている」と主張していることには敬意の念を感じるとも言っておきたい。しかし、理想的で理念的な脱領土化にしても、グローバル・エシックスや世界正義にしても、現在の状況のただなかでは、「倫理時限爆弾」の爆発の形で「発現」するしかなかつたとしたら、どうであろうか。そのとき、ムスリムの責任、また、非ムスリムの責任はどのように果たされるべきであろうか。現在のところ、その「試練」に耐えて責任を果たそうとしているのは、国境を越えて進む若者たちだけなのだ。

#### 過渡期の思想戦

革命は、常に国家の破壊や国家の建設でもあった。その過程では、必ずや大義に従う民衆の力が働いていた。それがコミュニケーションやタウンシップや評議会に「発現」していた。ところで、帝国貴族は、二十世紀を戦争と革命の世紀として総括するにしても、常に必ず、中近東やアフリカの革命と国家創建の経験を無視してきた。おのれの間に合わない破綻し失敗した企てであると見なし、そこに民衆の力を探知することも怠ってきた。もちろん、いかなる革命と国家創建においても、非理性的で非文化的で非文明的な事象は噴き出している〔14〕。しかし、そのただなかに、大義を実現する民衆の力を見て取るべきなのである。そのとき、はじめて、われわれは、イスラーム国支配層と有志連合

の双方を批判する立場に立つことができる。そのとき、はじめて、われわれは、国境を越えていく若者たちに連帯の挨拶を送りながら、確信をもって別の道を開くことができる。

過渡期である。情勢は混沌としており、敵と味方を見分けることも難しくなっている<sup>15)</sup>。しかし、それは喜ばしい報せでもある。われわれは、遠方においても近方においても、来たるべき民衆と来たるべき領土を探さざるをえなくなっているからである。

## 註

- (1) 「外国人テロ戦闘員になるために渡航を試みる者について深刻な懸念を表明」する国際連合安全保障理事会決議二二七八号に抗して、と言っておきた。
- (2) 自由選択のイデオロギーを信仰の立場から批判しながら、ノアの神話の解釈においてそれを越える地平に到っている次の論考も参照。Abū 'Amr Al-Kinānī, "It's Either the Islamic State or the Flood," *DABIQ*, Issue 2, p. 9.
- (3) Thomas Pogge, "Preface," in Thomas Pogge and Keith Horton eds., *Global Ethics: Seminal Essays* (Paragon House, 2008).
- (4) その欺瞞を批判するものとして次をあげておく。Anonymous, "Hijrah From Hypocrisy to Sincerity," *DABIQ*, Issue 3, pp. 29-33.
- (5) 井上達夫『世界正義論』(筑摩書房、二〇一二年)一九二―一九三頁。
- (6) 同書、二一四―二一五頁。
- (7) 何を分配・移転するのにかつてすら、何も考えられていないのが実情である。フローとしての所得の移転とは何を意味するのか。ドル紙幣を配るとでもいうのか。法人の資産がプロパティ(所有)と称しうるものなのか。それは移転や分配が可能な存在物なのか。

資本をどう心得るのか。合理的で現実的な処方箋を出していると自称する者こそ、具体的には何も考えていない。さらに言うなら、改良の困難にすら考え及んでいない。嘆かわしいことに、帝国貴族の多くは改良主義者ですらない。

- (8) ポストコロナル論者、文化政治論者、文化左翼は、いま何をやっているのかと問うておきた。
- (9) 中田考『カリフ制再興——未完のプロジェクト、その歴史・理念・未来』(書肆心水、二〇一五年)七―八頁。
- (10) イスラーム国のカリフ制宣言にもそれは明らかである。例えば、こんな一節が読まれる。「この国でこそ、アラブも非アラブも、白人も黒人も、西洋人も東洋人も、みな兄弟である。カリフ制こそが、コーカサス人、インド人、中国人「……」アメリカ人、フランス人、ドイツ人、オーストラリア人を結集させる。アラブが彼らの心をついにし、かれらは兄弟となる」(*DABIQ*, Issue 1, p. 7)。政治的には、ことに戦争状態においては、神の(非・)名とリベラル・デモクラシーなる名は等価であることに注意せよ。
- (11) 同書、一八三―一八四頁。
- (12) 同書、一九七―一九八頁。
- (13) 最近、沖縄・琉球の独立論や自治論が復活している。少しでも政治的に想像を働かせれば明らかであるが、その準・理想理論を表現するには、中国やロシア、あるいは逆に、米国、あるいは別に、台湾からの「支援」が不可欠である。その過程では、イスラーム国以上の「非寛容」な「酷薄」が必至である。その覚悟を抜きにして語られるべきことではない。
- (14) 例えば、明治維新の英雄は、その立場を問わず、テロリストでもあった。西南戦争は「酷薄」な内戦であった。
- (15) *DABIQ*, Issue 7, Foreword は、湾岸戦争以来の日本国の政治的位置を精確に捉えて批判している。したがって、日本国内での政権批判においてそれと相同の批判を繰り出すだけでは決定的に足りないということが自覚されるべきである。